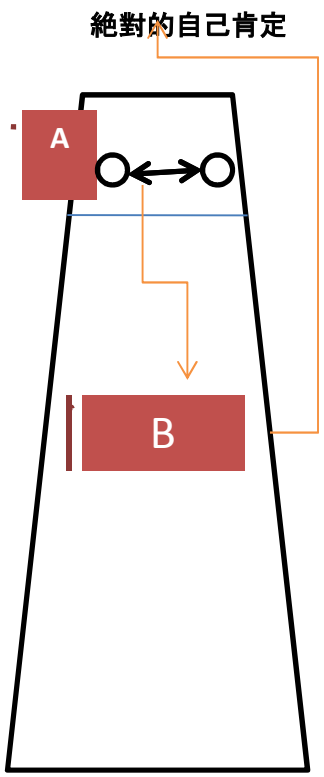
《日本的精神主義構圖》：日本は右圖の近代化概念を下圖の如く、表象（後楯）の概念としてしか捉へられなかつた。
A→B → C”＝ C2 （西歐概念の後楯化現象）

◎C2：後楯・護符（西歐概念＝上位概念）

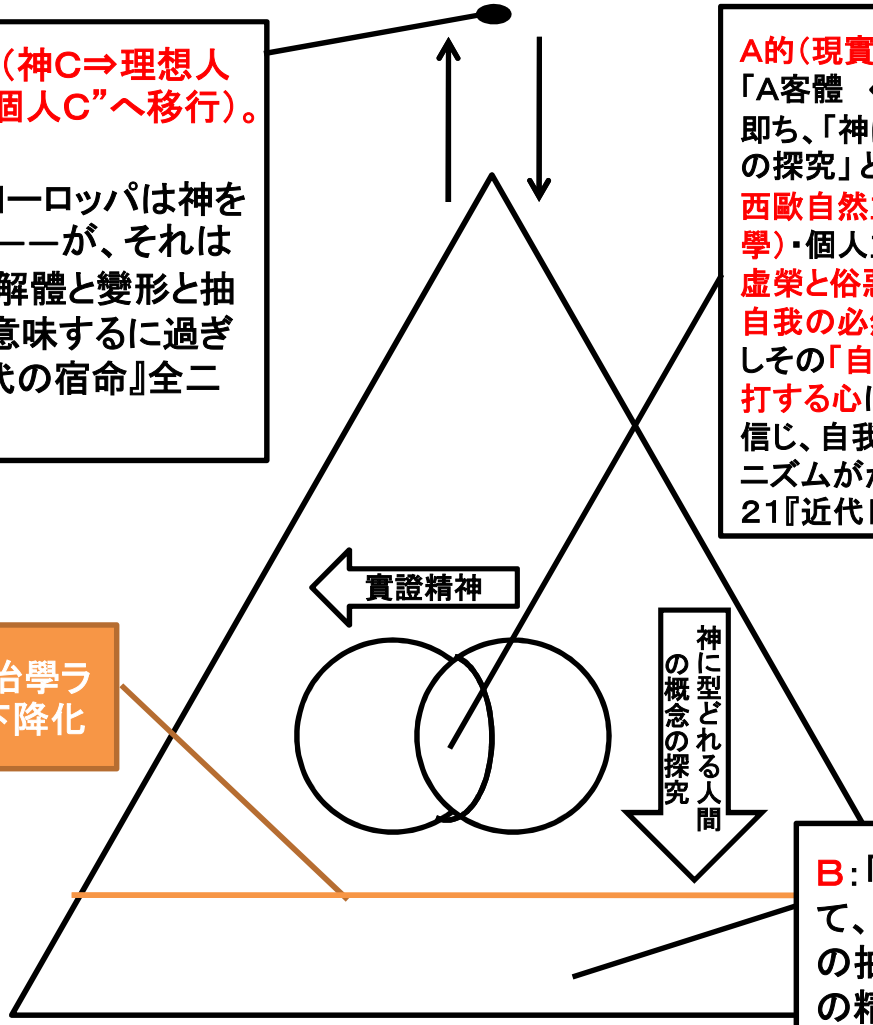


《彼我の差》西歐自然主義：「ヨーロッパの作家たちが自己（A’）をあへて作品（B）のうちに扼殺したのは、（「社會の醜惡と痼疾とを自己のそれとして受け容れた」爲に）、それ（A’）がすでに實生活（A）においても生きる道をもたなかつたからであり、彼等はさういふ自己（A’）を作品（B）のうちに甘やかすことを徹底的に嫌つたからであつた。いや、彼等は自己（A’）のうちに甘やかしうる餘地を見いだしえなかつた――（リアリズム=西歐自然主義によつて）それ（A’）はエゴイズムと虚榮と俗惡とのかたまり以外のなにものでもなかつた」（『近代日本文學の系譜』P20）のを徹底的に思ひ知らされたからである。

西歐近代（神C⇒理想人間像C⇒個人C”へ移行）。

＊「近代ヨーロッパは神を見失つた――が、それはただ神の解體と變形と抽象化とを意味するに過ぎぬ」（『近代の宿命』全二P466）。

A的（現實的）客體化：
「A客體 ⟸ A’主體」
即ち、「神に型どれる人間の概念の探究」として齎されたもの・・・西歐自然主義文學（リアリズム文學）・個人主義等⇒「エゴイズムと虚榮と俗惡とのかたまり」と言ふ自我の必然を其處に見た。しかしその「自我の卑小と醜惡とを鞭打する心には、精神Bの偉大さを信じ、自我の擴張を願ふヒューマニズムがかくされてゐる」（全一P21『近代日本文學の系譜』）。



精神の政治學ラインの最下降化

B：「神は人體を失つて、完全な精神としての抽象化を受ける。その精神が文學（西歐自然主義文學）の領域」。